

講義室における学生の着席位置と授業アンケート調査による 評価との関連についての考察

*A consideration about some relationships between students' seat position in the lecture room
and evaluation with class questionnaire survey*

渡 邊 席 子
大阪市立大学大学教育研究センター

WATANABE, Yoriko
Osaka City University, Center for Research and Development of Higher Education

キーワード：座席の選好、学生による評価、構造的問題

Keywords: seat preference, evaluation by students, structural problems

1. 調査の概要

1.1. 目的

学生による授業アンケート調査は、現在、授業改善のためのツールとして多くの大学で実施されている。他方で、学生による授業アンケート調査の結果に影響する可能性のある、個々の教員の努力だけではコントロールしきれない構造的問題についてもまた、多様な議論が存在している。このような構造的問題のひとつとして本稿で議論するのは、学生が教室内で実際に着席しているエリアが、授業に対する評価に及ぼす影響についてである。

多くの先行研究では、教室における学生の座席の選好と、その学生の個人特性、学習行動、学業成績および教員・授業に対して行う評価には一定の関連性があるとされている。これらの先行研究をまとめると、教室前方に着席する、もしくは前方を好む学生は、教室後方に着席する、もしくは後方を好む学生に比して相対的に学習意欲が高く、授業に興味関心をもち、授業に集中し、すぐれた学業成績をあげている傾向があるといえる。また、一部の先行研究では、教室前方に着席する、もしくは前方を好む学生ほど教員や授業を高く評価する傾向が見られることが示されている。

教室の座席配置は、教員個人の努力だけでは変えられない構造的問題の一種である。そこで本研究では、特に履修者の多い講義科目における教室内での学生の着席エリアに着目した。そして、着席エリアが、本学で行われた学期中間時点での学生による授業アンケート調査の回答結果に与える影響について考察することを目的とし、授業アンケート調査で得られたデータの再分析を試みた。

1.2. 調査方法・調査対象

分析の対象となったのは、2007年度と2008年度の学期中間時点で実施された、大阪市立大学全学共通科目総合教育科目Bの講義科目を対象とする学生による授業アンケート調査データである。調査についての基礎データを表1に示す。

1.3. 調査内容・項目

2007・2008年度の学生による授業アンケート調査の項目のうち、本稿で分析の対象となった共通項目9項目を表2に示す。

表1 各年度の調査対象等基礎データ

	2007年度	2008年度	合計
調査実施時期	各学期中間		
調査対象科目（講義）数	65	63	128
調査対象科目の履修登録者総数	12920	12005	24925
分析対象マークシート数	7682	7180	14862

表2 2007年度・2008年度授業アンケート調査 共通項目

問1 (出席頻度)	この授業にどの程度出席していますか。 5=1度も欠席していない 4=1~2回欠席 3=3~4回欠席 2=5回以上欠席 1=覚えていない
問2 (着席エリア)	あなたはいつも、教室のどのあたりに座っていますか。 5=教室前方1/4より前 4=教室前方1/4~中ごろ 3=教室中ごろ~教室後方1/4 2=教室後方1/4より後ろ 1=毎回ばらばら
問3 (課外学習時間)	この授業のためにどのくらい課外学習（予習復習宿題）を行いましたか。週当たりの平均をお答えください。 5=120分以上 4=60分くらい 3=30分くらい 2=15分くらい 1=ほとんど行わなかった
問4 (意欲的取組)	あなたは、意欲的に授業に取り組んでいますか。（授業への参加、課外学習の実施、教員への質問などを積極的に行っていますか。） 5=強くそう思う 4=そう思う 3=どちらともいえない 2=そう思わない 1=全くそう思わない
問5 (目標理解)	あなたは、授業のねらいや学習目標を理解したうえで授業に取り組んでいますか。 5=強くそう思う 4=そう思う 3=どちらともいえない 2=そう思わない 1=全くそう思わない
問6 (内容理解)	授業の内容は理解できていますか。 5=強くそう思う 4=そう思う 3=どちらともいえない 2=そう思わない 1=全くそう思わない
問7 (授業の速さ)	授業のペースについてどのように思いますか。 5=速すぎる 4=やや速い 3=適度である 2=やや遅い 1=遅すぎる
問8 (授業の分量)	授業の分量についてどのように思いますか。 5=多すぎる 4=やや多い 3=適度である 2=やや少ない 1=少なすぎる
問9 (興味関心学びたい)	この授業を受けたことによって、授業で扱った内容・分野に対する興味・関心が増し、もっと学びたいと思いましたが。 5=強くそう思う 4=そう思う 3=どちらともいえない 2=そう思わない 1=全くそう思わない

1.4 調査結果の公表先

本稿に関連して過去に作成・公表されている論文は次のとおりである。

講義室における学生の着席位置と授業アンケート調査による評価との関連についての考察
渡邊 席子（大阪市立大学大学教育研究センター）
2009年9月発行 大学教育 第7巻第1号、p31-38.

2 調査結果の概要

2.1 着席エリアと授業アンケート調査共通項目への反応との関係

本稿で示す結果は、「学期中間時点までに学生が教室内で着席していたエリア」と、「学期中間時点で実施された授業アンケート調査にて学生が行った共通項目への回答」との関連を示すものである。よって、今回の結果がすべての授業に対して一般性をもつとは限

らないことをおさえた上で、分析を行う。 めたものが表3である。表中の数字のうち、左が平均
 「問2 着席エリア」に対する学生の回答別に、共 値、括弧内が標準偏差、右が度数である。
 通項目への学生の回答平均値、標準偏差、度数をまと

表3 学生の着席エリアごとの共通項目の平均値、標準偏差、度数

項目	問2 着席エリア 選択肢1 毎回ばらばら	問2 着席エリア 選択肢2 後方1/4より後	問2 着席エリア 選択肢3 中～後方1/4	問2 着席エリア 選択肢4 前方1/4～中	問2 着席エリア 選択肢5 前方1/4より前
問1 出席頻度	3.46(.79)1777	3.40(.80)2338	3.46(.78)3756	3.58(.70)3433	3.64(.69)2897
問3 課外学習時間	1.38(.84)1772	1.25(.68)2306	1.36(.81)3702	1.38(.83)3376	1.56(1.06)2855
問4 意欲的取組	2.88(1.10)1812	2.59(1.11)2330	2.80(1.01)3742	2.98(1.04)3412	3.29(1.09)2886
問5 目標理解	3.15(1.05)1814	2.95(1.05)2355	3.12(.97)3753	3.25(.96)3437	3.47(1.05)2916
問6 内容理解	3.40(1.06)1817	3.20(1.10)2351	3.35(1.00)3758	3.51(.97)3434	3.72(1.03)2910
問7 授業の速さ(1)	3.12(.61)1816	3.15(.56)2345	3.12(.54)3759	3.16(.55)3430	3.17(.62)2914
問7 授業の速さ(2)	4.45(1.11)1816	4.49(1.03)2345	4.52(.99)3759	4.47(1.02)3430	4.38(1.12)2914
問8 授業の分量(1)	3.22(.62)1816	3.24(.61)2349	3.22(.55)3762	3.22(.55)3436	3.22(.61)2916
問8 授業の分量(2)	4.38(1.16)1816	4.37(1.14)2349	4.44(1.10)3762	4.42(1.05)3436	4.37(1.14)2916
問9 興味関心学びたい	3.29(1.05)1801	3.20(1.03)2345	3.33(.96)3732	3.45(.97)3399	3.65(1.02)2885

「問1 出席頻度」は「覚えていない」を除いて4点満点に換算し再計算されている。

「問7 授業の速さ(1)」および「問8 授業の分量(1)」は素点の平均値であり、「問7 授業の速さ(2)」および「問8 授業の分量(2)」は、選択肢3「適度である」が最も高くなるように再計算されている。

続いて、着席エリアによって各共通項目への学生の および問3から問9までの授業アンケート調査共通項
 回答平均値に差がみられるかどうかを検討するため、 目への回答を従属変数とした分散分析と下位検定を行
 「問2 着席エリア」への回答を独立変数とし、問1、 った。分析結果を表4に示す。

表4 着席エリアを独立変数とした分散分析結果と下位検定結果

項目	着席エリアの効果	下位検定結果(5%水準で有意)
問1 出席頻度	F(4,14196)=43.31, p<.01	5 4 > 1 3 2
問3 課外学習時間	F(4,14006)=44.91, p<.01	5 > 1 4 3 > 2
問4 意欲的取組	F(4,14177)=155.80, p<.01	5 > 4 > 1 3 > 2
問5 目標理解	F(4,14270)=99.82, p<.01	5 > 4 > 1 3 > 2
問6 内容理解	F(4,14265)=98.462, p<.01	5 > 4 > 1 3 > 2
問7 授業の速さ(1)	F(4,14259)=4.73, p<.01	5 4 > 3
問7 授業の速さ(2)	F(4,14259)=7.83, p<.01	3 2 4 > 5
問8 授業の分量(1)	F(4,14274)=.45, ns.	
問8 授業の分量(2)	F(4,14274)=2.80, p<.05	
問9 興味関心学びたい	F(4,14157)=80.31, p<.01	5 > 4 > 3 1 > 2

分析の結果、「問8 授業の分量」以外のすべての
 共通項目への学生の回答平均値に、着席エリアの効果
 がみられる可能性が示された。今回の結果の方向性と
 先行研究で示されている結果はおおむね合致してお
 り、前方に着席している学生ほど授業アンケート調査
 の各項目に対してよりプラス方向の反応をしていると

いえる。

限られた規模で実施された調査データによる結果で
 はあるが、本研究の結果は、履修者の多い科目を多数
 含み、授業内容も授業方法も多様であり、かつ、履修
 者の学部・学年もまた多様である全学共通科目総合教
 育科目Bの講義科目について、教員の個人的な努力だ

けではコントロールしきれない教室のもつ構造的問題が、学期中間時点で行われる授業アンケート調査結果に影響をもたらしていた可能性を示唆するものである。

2.2.FD義務化と中央教育審議会答申

大学をとりまく状況は、近年大きく変化している。1999年の時点では努力義務であったFD活動の実施は、2007年度から大学院で、2008年度から学士課程で義務化された。加えて中央教育審議会（2008）による「学士課程教育の構築に向けて」（答申）では、FD活動に関することがらや、学生による授業アンケート調査の在り方について、一定の方向性が示されている。答申では、「FDを単なる授業改善のための研修と狭く解するのではなく、我が国の学士課程教育の改革を目的とした、教員団の職能開発として幅広く捉えることが適当である（39頁）」と述べられているとともに、「FDを実質化するには、適切な教育業績の評価も不可欠である（40頁）」こと、また、「学生による授業評価の結

果は、業績評価の指標としての信頼性には課題もあるが、教員の自己評価や職能開発の活動に生かすことは重要であると考え（40頁）」などの提案もなされている。

このようなFD活動実質化および教育業績評価が求められる流れの中で、学生による授業アンケート調査に影響する構造的問題の存在が考慮されないまま、調査結果を教育業績の評価等に安易に用いようとする動きをけん制するためにも、教員個人の努力だけではコントロールしきれない構造的問題とその影響についての実証的研究が、さまざまな形で継続的に実施されていくことが必要である。

参考文献

- 中央教育審議会（2008）, 学士課程教育の構築に向けて（答申）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm